

## 東方医学にできること ～現時点での可能性～

新型コロナウイルス感染症「COVID-19」(coronavirus disease 2019)に対して、中国では、中国国家衛生健康委員会が新型コロナウイルス感染症に関する中西結合医療のガイドライン「新型コロナウイルス肺炎診療方案」(試行第六版、2020年2月18日発布)(novel coronavirus pneumonia diagnosis and treatment plan, provisional 6th edition)を出しています。

その中では、下記の臨床病期に分けられ、様々な方剤が使われています。

軽型 (1) 寒湿郁肺証 (2) 湿熱蘊肺証

普通型 (1) 湿毒鬱肺証 (2) 寒湿阻肺証

重症 (1) 疫毒閉肺証 (2) 気営両燔証

下記が原文(中国語)

<https://mp.weixin.qq.com/s/CKyl8JhdpTV-GM-NGh0yvA?fbclid=IwAR1DwvE0yNCA5CdHNWu94XeRvcStjELvjRUhzJQ-8d7Xo92szodXmqIcjAA>

下記がその日本語訳(京都府京田辺市 谷村医院院長のブログより)

[https://blog.goo.ne.jp/yayoikaze/e/fdc9289c37890c1d61f92243d92f6c13?fbclid=IwAR1Q4vCsXeZA7N6AE0wM7PoFH-Es0GoFEzG8gobH\\_RndfCHcxQSpSbnABY](https://blog.goo.ne.jp/yayoikaze/e/fdc9289c37890c1d61f92243d92f6c13?fbclid=IwAR1Q4vCsXeZA7N6AE0wM7PoFH-Es0GoFEzG8gobH_RndfCHcxQSpSbnABY)

さらには、上記に記載されている、清肺敗毒湯(麻黄9g、炙甘草6g、杏仁9g、生石膏15～30g、桂枝9g、沢瀉9g、猪苓9g、白朮9g、茯苓15g、柴胡16g、黄芩6g、姜半夏9g、生姜9g、紫菀9g、冬花9g、射干9g、細辛6g、山薬12g、枳実6g、陳皮6g、藿香9g)に関して

国家衛生健康委員会、国家中医薬局は臨床で得た214例の有効なデータに基づいて、2月6日に全国範囲で湯薬「清肺排毒湯」の使用を薦める公文書を発表しています。その結果、17日までに、10の省・自治区にある57の指定病院で701人の感染者に投与した結果、130人が全治・退院し、51人が症状が消え、268人が病態が軽減し、221人が症状が安定していて悪化はしなかったと報告しています。

また、これまで、6万人以上の患者に漢方薬を投与しており、武漢で実施されている臨床研究によると、軽症患者の治療に漢方薬と西洋薬を併用した場合、臨床症状が消えるまでの時間は2日短縮できた。また、重症患者の場合、主な症状と関連指標を改善するほか、病態の悪化や危篤な状態に陥ることを防ぎ、致死率を引き下げることがもつなげると報告されています。

<https://www.recordchina.co.jp/b783720-s16-c10-d0.html?fbclid=IwAR0XnlonsDUcewG8RbYw6YqxnHUqCo7mxUYMn--wcjDJ3c7mc0nrO8p9H4Q>

日本では、なかなかここまで、東方医学的治療が、急性感染症における西洋医学的な治療と併用されることは少ないですが、以前より、気を補う補気剤や、解表剤と呼ばれる主として上気道の感染症に用いられる薬(生薬では黄耆・人參・麻黄など、方剤では補中益気湯・麻黄附子細辛湯など)が感染防御に有効であるという研究が数多くあります。代表的なものを3つ上げます。

- ・インフルエンザに感染したマウスの生存率を補中益気湯が高める (Mori K, Kido T, Daikuhara H, et al : Antiviral Research 1999, 44, p103-111)
- ・補中益気湯はヒト気管上皮細胞のライノウイルス感染を阻害する (Yamaya M, Sasaki T, Yasuda H, et Br J Pharmacol 2007, 150, p702-710)
- ・かぜ症候群に対する麻黄附子細辛湯の有用性 (日本東洋医雑誌. 第 47 巻 第 2 号. 245-252, 1996.)

上記は、直接、新型コロナウイルスへの予防効果、重症化抑制効果があると認められている文献ではないですが、感染防御力を高めることに利益はあっても弊害はないことは経験的に分かっていることであり、鍼灸治療や、食養生、薬膳の知恵も含めて、東洋医学、日本東洋医学会にできることは、可能性としてですが、あると考えています。

もし、このようなご相談をされたければ、日本東洋医学会会員の医療施設にお問い合わせみて下さい。